

## 論文の内容の要旨

論文題目            聞こえない親を持つ聞こえる人々  
                          ——文化の中で自己の語りはどう作られるのか——

氏 名            澁 谷 智 子

「ろう文化」という思想においては、手話を使う人々を言語的少数者と捉え、視覚を重視した独自の行動様式や価値観を持つ人々と考える。こうした「ろう文化」の考え方は、手話が音声言語とは別の文法を持つ独立した言語であることが学問的に証明されたことを背景に、アメリカのマイノリティ運動の一つとして主張され、1990年代になって、日本にも紹介されるようになった。本論文では、聞こえない親を持つ聞こえる人々の語りに注目することで、「ろう文化」という枠組みが、個々の体験の解釈にも作用していく様を取り上げる。

聞こえない親を持つ聞こえる人々はコーダ (Coda: Children Of Deaf Adults) と呼ばれ、身体的には聞こえながらも、言語や文化の面では聞こえない親の影響を強く受けて育つ。たとえば、日本のコーダの場合、生活の中で手話と日本語を恒常的に使うという意味で、実質上のバイリンガルになっていることも少なくない。しかし、日本では、こうした二言語使用や二文化体験に起因することも多いコーダの葛藤は、ごく最近まで「文化の違い」によるものという解釈を与えられないまま、漠然とした違和感でのみ捉えられてきた。そして、そのような違和感は、世間に対して自分や自分の家族を特殊で低い存在と位置づけることで、納得されてしまいがちだった。こうした解釈には、身体機能の違いに目を向け

た「障害者」／「健常者」という分類の仕方が強力に働いていたことも影響している。この分類に照らせば、聞こえない親をもつ聞こえる子は「障害者」の親をもつ「健常」の子どもであり、多数派に属する存在であることが自明視されていた。このように、その社会の多数派とは違う言語や文化にふれているとは認識されず、「障害者の家族」という視点でのみ見られてきたコーダの状況は、国を越えた異文化体験をクローズアップされる、エスニック・マイノリティの子どもや帰国子女などとは異なっている。こうした子どもたちは、国際移動を前提とした二言語使用や二文化体験があることを想定され、認識される違いは「文化の違い」として語られがちであるのに対し、コーダの場合には、違いは聞こえない親の子育て能力や常識の欠如によるものと理由付けされてきたのである。

本論文では、従来は見過ごされることの多かったコーダという事例を見ていくことを通して、既存の文化概念や障害概念が前提としている考え方を問い直す。すなわち、国家やエスニシティを基本とした従来の文化の分類では抜け落ちてしまう文化的越境者の一例としてコーダを位置づけることで、グローバル化が進み人やモノの移動も頻繁になってきている今日においては、文化をより多角的に捉える必要があることを提起する。また、自らは心身機能の障害は持っていないコーダが社会からの特別視や同情に直面する現状を追い、「障害」が個人の身体の状態だけでなく社会によっても作られている面があることを指摘する。

コーダをめぐる背景を説明する第1章では、まず、コーダを複数の文化にふれて育つ子どもと捉え、「CCK (Cross-Cultural Kids)」という概念を紹介する。コーダを含めた「CCK」の体験は、文化が自明なものとしてあるのではなく、人々との対話を通して個人の中を獲得されていくものであることを示している。また第1章では、日本の聴覚障害者を取り巻いてきた環境を歴史的に概観する。ろう教育において手話は長い間抑圧されてきたが、聞こえない人が登場するドラマの人気や聴覚障害者団体の活動は、社会における手話のイメージを向上させ、手話講習会や手話サークルなど、手話学習の場が多く作られるようになった。こうした土壌の上に導入された「ろう文化」思想は、様々な摩擦を起こしつつも次第に定着してきており、それに伴って「コーダ」という概念も知られるようになってきている。

第2章がテーマとするのは、コーダのコミュニケーションである。長年、手話が言語とみなされず、身体機能を基準に親子が異なるカテゴリーに属すと捉えられてきた状況は、コーダと聞こえない親が使うコミュニケーションの方法を、言語という枠に留まらない多様なものにしていく。手話は重要ではあるものの、声、口話、筆談、身振り、ホームサインなどの方法もよく用いられている。しかし、コーダは思春期になると、親に対して自分の言いたいことを十分に伝えられていないと感じることも多かった。また、コーダの中に

は、日本語モノリンガルとの比較や、自分の手話が相手に通じないなどの実感から、日本語や手話に対する苦手意識を持っている人も多く見られた。近年では、手話の社会的地位が上がるにつれ、コーダが手話を正規に学んだり手話に関わる職業に就いたりすることも増えてきているが、こうした経験は、コーダが自分の手話がどのようなものであるのかを振り返るきっかけとなっている。また、こうした手話学習の場において、コーダは、少数派に属する親を持つことと少数派言語が流暢に使えることを結びつけて見る風潮があることも実感している。

第3章では、コーダの体験と社会の障害観との関連について論じる。「障害」は個人の身体の問題として捉えられ、医療や能力不足と結び付けて解釈されることが多いが、実は、何が「障害」とみなされるか、「障害」をどのように見るのかは、それぞれの社会の人々の考え方や制度によっても変わってくる。障害学においては、心身機能の欠損を「インペアメント (impairment)」、社会のしくみによって障害者にもたらされている不利益や活動の制約を「ディスアビリティ (disability)」と呼び、この両者を概念的に区別してきた。しかし、実際のところ、「障害」は子育ても含めてその能力を疑われることと結びついており、「障害」がもたらす「苦労」や「大変さ」を本人や家族が努力によって越えていくという図式に、障害を持つ親もその子どもも巻き込まれている。しかし、ここにはケアの方向性の問題も関わっており、子どもが親のケアや通訳を行なうことは、子どもの年齢が幼ければ幼いほど注目される。

コーダの場合、親との生活の中で行なうことが多いのは、親に音情報を伝えることと通訳をすることである。聞こえる人の社会では、音の使い方のルールが暗黙のうちに共有されているため、コーダの多くは、聞こえない親が違和感をもって見られぬよう、親の音の出し方を状況に合わせて調整している。しかし、音の「規範」と「逸脱」としてではなく、「音の意味が細かく定められている世界」と「音に意味が見出されない世界」があり、両者は共存するというように見方が変われば、コーダが音をコントロールするあり方も変わってくる。コーダが家庭で行なう通訳の特徴となるのは、1) 親子という私的な関係性の中で通訳が行なわれること、2) 子どもという立場で、聞こえない親と聞こえる大人の間で通訳を担うということである。コーダは日常生活や学校関係の通訳を行なうことが多いが、中には医療や金融関連の通訳など、子どもには負担の大きい通訳をすることもある。また、通訳することを通して、本来なら子どもが聞かなくてもよいことを聞いたり、ろう者と聴者の話し方のずれを調整したりする中で、早くから大人びてしまったように感じているコーダもいる。

しかし、多くのコーダが強調するのは、コーダにとっては、親が聞こえないことそのものよりも、親が聞こえないことに対するまわりの人の見方のほうが負担になっているということである。聞こえない親を社会的弱者とみなし、同情や努力への期待といった先入観でコーダやその家族を見る見方が強く働いている状況では、逆にそれに立ち向かうために、

コーダは自分の家族が普通であることを強調しなくてはいけなくなることもある。こうしたコーダの体験からは、やはり、「障害」を能力不足や苦勞と結びつけて解釈する社会の見方（ディスアビリティ）の作用の大きさを窺うことができる。

第4章では、コーダの語りの生成と変化を時間的空間的な広がりの中で論じる。聞こえない親の元で育ったことについての語りは、常にコーダ個人の現在の立場から過去を振り返る形で作り出され、しかもそれは時の経過と共に変化している。就職や転職、離家、結婚、出産といった、人生の節目となる出来事はコーダの会おう世界を広げ、また、コーダが手話や聞こえないことに関する知識を得たり、コーダ同士で深く話したりすることで、自分や自分の家族をどう位置づけるかも明確になる。特に、親に対する見方と、通訳という行為の意味は、時間と共に捉え方が大きく変わってくる事柄である。こうした個々の経験や環境、性格の違いに加え、それぞれのコーダは、自分の生活している社会の考え方の影響も強く受けている。たとえば、日本人コーダの語りでは、アメリカのコーダのように「機能不全」などの心理学的用語が用いられることはほとんどなく、アイデンティティのジレンマについてもあまり痛切に語られないといった違いが見られる。こうした違いは、その社会において、どのように説明すれば、コーダの置かれている状況を世間の人々に理解してもらいやすいかということとも結びついている。

コーダの語りが作られ、変容していくプロセスは、個人がその社会で共有される意味の体系を取り込みながら、物事をどのようにまなざし、感じ、意味づけていくかを、鮮やかに示している。自己の体験を語りとして紡いでいくことは、その社会に生きる人々や情報との相互作用の中で作られる、実に動的な文化的営みなのである。